

(2) 国際シンポジウム開催事業「PRION2016」

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター 理事長
PRION2016 TOKYO 会長（実行委員長） 水澤 英洋



水澤 英洋 実行委員長

プリオン病は、ヒトのクロイツフェルト・ヤコブ病 [Creutzfeldt-Jakob 病（以下CJD）] を始めとして、多くの動物にも見られる人獣共通感染症である。CJDは、発症率が100万人に約1名と超稀少疾患であり、多くは発症すると急速進行性の認知症を呈し、数ヶ月～1年くらいで100%死に至る難病であり遺伝性の病型もある。その原因は、正常なプリオン蛋白が感染性を有する異常プリオン蛋白すなわちプリオンに変換して神経細胞を障害するとされているが、このプリオン蛋白の異常化、感染性、特に経口感染などのメカニズムはまだ全くといってよいほど解明されていない。

このように、世界で最も悲惨な疾患といっても過言ではないプリオン病の克服をめざす学会として NeuroPrionがあり、牛海綿状脳症とそのプリオンによるヒトへの感染である変異型CJDの発生源となった欧州を中心として、世界で唯一・最大のプリオン病の国際会議を開催しているが、欧州以外ではカナダと米国のみであった。この度、難病医学研究財団の事業として欧米以外では初めてのPRION2016 TOKYOを、2016年5月10日～13日の4日間、学術総合センター（東京）にて開催した。

参加者は、26カ国から380名で、前年に米国で開催されたPRION2015にも匹敵する規模となった。その内、海外からの参加者は231名と60%を超えてまさに国際会議に相応しいものであった。本会議ではこれまでに無い特徴として、プリオン病の悲惨さと重要性、そして一日も早いその克服を訴えるPRION2016 Tokyo Declarationが採択され研究者代表4名（Hidehiro Mizusawa, Jean-Phylippe Deslys, Kuwata, Katsumi Doura）と患者・患者会代表4名（Suzanne Solvyns, Muneto Ueda, Debbie Yobs, Naoetsu Sodenno）の署名を以って全世界に発信された。まさに歴史的な出来事であり、その全文が国際誌Prionに掲載された。開会式では会長による開会宣言の後、高久史磨難病医学研究財団会長・日本医学会会長、末松誠日本医療研究開発機構理事長のご挨拶、そして急遽、ご臨席ができなくなった安倍晋三内閣総理大臣からの力強いメッセージが代読され、200名を超える参加者に大きな感銘と勇気を与えた。

学術プログラムでは、米国NIHのReed B. Wickner博士から感染性プリオン・アミロイドの特徴的な β シート構造について、チューリッヒ大学のAdriano Aguzzi教授からは正常プリオン蛋白の機能と毒性について格調の高い開会講演が行われ幕を開けたが、その他26の招待講演と23の一般口演、193のポスター発表が行われ大変盛況であった。一般口演も、プリオン蛋白の転換と伝播、プリオン病の発症機序 I・II、プリオンの概



高久 史磨 財団会長



講演会場

念の拡大、ヒトのプリオン病の診断、ヒトのプリオン病のサーベイランス、動物のプリオン病の各セッション毎に、招待講演と同じ一つの会場で全員参加のプレナリー形式で発表された。とくに、現在話題のプリオンの構造、アルツハイマー病やパーキンソン病の原因蛋白もプリオンとして自己増殖すること、欧州で初めての鹿のプリオン病である慢性消耗病が発見されたこと、韓国でも慢性消耗病の鹿が著増したこと、鹿のプリオンで土壌や植物も汚染されている

ことなどが相次いで報告された。またわが国を中心に開発されたRT-QUIC法は、超微量の異常プリオン蛋白を測定する技術として、髄液検査のみならず様々な応用が世界中に広がっていることが報告され、主催者にとっては大変嬉しいことであった。

若手研究者の支援として、各国の審査員によりYoung Investigator Awardが5名、最優秀ポスター賞が11名選出され、最終日の閉会式にて授与式が行われ、大いに若手の研究の活性化・支援に貢献した。また、34名の若手研究者にはトラベルグラントが提供され大変感謝された。お昼は4日間に亘り毎日ランチセミナーを開催し、プリオンの新しい滅菌法、プリオン病からアルツハイマー病まで、日本の遺伝性プリオン病、 α シヌクレイン・プリオンについて最先端の話題を、ランチボックスという日本文化とともに味わっていただくことができ大変好評であった。

研究者間の交流も国際会議の重要なファクターである。講演会場の質疑応答はもちろん、ポスターセッションでもFace to Faceの活発な議論が大いに盛り上がりを見せた。また、開会式後の歓迎会や最終日の情報交換会も満員の盛況で、プリオン病のような超稀少疾患にとって欠かすことのできない国際交流が大きく進展した。

一般市民への貢献としては、啓発のために開催前にプリオン病全般とPRION2016 TOKYOに関するプレス・セミナーを1回、会期中にアルツハイマー病の感染性および慢性消耗病・牛海綿状脳症を中心とする動物のプリオン病に関するプレス・カンファレンスをそれぞれ1回ずつ行い大変好評であった。特に後者は日本人のみならず海外参加者も講演を行い、メディアを通じての国民への啓発に役立ったものと期待される。さらに関連して本会議に先立ちOECDの支援による動物プリオン病の国際シンポジウムが、また別会場では内閣府食品安全委員会によるプリオン病の勉強会も開催され、関連領域の発展にも大いに貢献したと喜んでいただくことができた。



会場風景

このようにPRION2016 TOKYOは予想以上の大きな成果を挙げることができ、難病医学研究財団ならびに関係各位に厚く御礼を申し上げる次第である。